

# 兵庫 J C C

兵庫県協同組合連絡協議会機関誌

■ 第 10 号  
■ 1988年11月20日発行  
■ 編集発行

兵庫県協同組合連絡協議会  
Hyogo-ken Joint Committee of Co-operatives

■ 編集事務局  
〒650 神戸市中央区海岸通1番地  
兵庫県農業協同組合中央会  
TEL. (078)333-5888

目 次	1. I C A 第29回大会開かれる…………… 1	6. 泊り込み農業体験…………… 8
	2. 第66回国際協同組合デー兵庫県記念大会を開く…………… 2	7. 協同組合運動に生きる…………… 8
	3. 賀川豊彦と協同組合(記念講演から)…………… 3	神戸市漁協 参事 小坂靖三…………… 8
	4. いま、協同組合では…………… 4	8. やさしい協同組合論⑧…………… 10
	漁協…………… 4	9. 協同組合点描…………… 11
	農協…………… 5	福崎町農協 営農生活指導課長 安藤政義
	生協…………… 6	坊勢漁協 参事 上田常夫
	5. 協同組合運動への提言…………… 7	10. 協同組合研究 NOW(No.10)…………… 12
	奈良女子大学 教授 武内哲夫…………… 7	

## ICA 第29回大会開かれる 協同組合の基本的価値をテーマにして



ICA大会で高村日生協会長が演説

第29回 I C A (国際協同組合同盟)大会は、去る7月7日より10日まで、スウェーデンのストックホルムで、世界各国の協同組合代表約1,000人が参加して開催された。この大会は4年に1度開催されているもので日本からも日生協、全中、全農、全漁連等の代表が参加した。

この大会で議論・決定された主なものはつぎのとおりである。

- (1) 第30回大会を1992年に東京で開催すること。  
高村・日生協会長が次回大会の日本招請演説を行った。1895年にロンドンで第1回大会が開催されて以来次回で30回を数えるが、アジアでは初めての大会となる。
- (2) 執行委員に日本の堀内・全中会長が再選された。  
1988年～1992年の4年間、I C A運営にあたる13人の執行委員の選挙が行われ、日本の各種協同組合を代表した堀内会長が当選した。
- (3) 協同組合の基本的価値に議論が集中した。

今大会の最大のテーマは『協同組合とその基本的価値』であった。議論は、マルカス会長の「組合員参加」、「民主主義の徹底」、「誠実」、「他人への配慮」の4つの価値提唱を基本とする討議資料を中心に展開された。

世界の協同組合運動が様々な困難(企業との競争激化、効率追求、大規模化、組合員結束の弱体、民主運営の欠如等々)に遭遇する状況のなかで、各国のこれについての関心は極めて高く、40名の代表からの発言があった。

各国代表の発言では、他企業との競争が激化するなかでの協同組合理念の実践、若者・婦人の組合参加の促進、発展途上国における協同組合の役割、開発援助の強化の必要性等の意見が多く出された。

これらを踏まえて1992年に向け、ICAは協同組合の諸原則を見直し、東京大会で論議することとされた。

#### (4) その他主要な決議事項

- ・ 開発途上国の援助強化を
- ・ 協同組合の国際姉妹組合提携の促進を

- ・ 1995年(ICAの創立100年の年)を国際協同組合年に
- ・ 1992年EC市場統合にむけて協同組合の対応強化を
- ・ 婦人の社会的・経済的平等の達成を
- ・ 児童の権利保護を
- ・ 国際累積債務に果たす協同組合の役割強化を

— 日本協同組合連絡協議会発行「第29回協同組合同盟大会報告書」より抜粋—

## 第66回国際協同組合デー 兵庫県記念大会を開く



大会宣言を朗読する濱尾会長

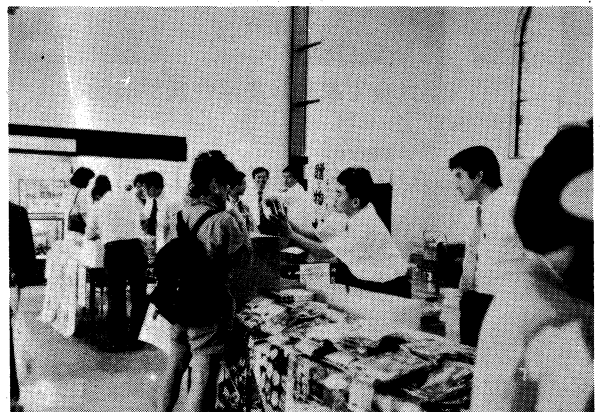
第66回国際協同組合デー・兵庫県記念大会は、兵庫JCC主催により、7月2日(土)、神戸市東灘区の灘神戸生協生活文化センターで開催した。

今回は、賀川豊彦の生誕100年に因んで、戦前の記録映画「生協運動の父、賀川豊彦のありし日」の上映と、生誕百年記念実行委員長の隅谷三喜男氏の講演をおこなった。

記念式典では、主催者を代表して県漁連の酒部龍三会長があいさつし、「各協同組合の発展とともに

今後一層の協同組合間の連帯を図っていこう」と述べた。また、参加者を代表して県農協婦人組織協議会の濱尾繁代会長が、「兵庫JCC宣言」を朗読。「食料の国内自給率向上について、生産者・消費者が共通の理解を深める」「協同組合に対する批判に強く反対する」「明るく住みよい地域社会づくりと世界平和への貢献を目指し積極的な活動を展開する」などを盛り込んだ同宣言を参加者全員の万雷の拍手で採択した。

会場では、大会と並行して県下の農協、漁協、生協の活動をパネル展示で紹介する「兵庫の協同組合展」のほか、各協同組合の生産物が展示即売された。



各協同組合の生産品の展示・即売会

# 賀川豊彦と協同組合



東京大学名誉教授  
隅谷 三喜男氏

賀川豊彦は日本の協同組合の創立者でした。彼は明治の末から戦後にかけて、日本の社会において個性豊かで包括的な運動をした人物でした。スラムの指導者であり労働組合の指導者、農民組合の組織者であり指導者、そして無産政党のリーダー、およそ社会運動のすべてに関わり、しかもその中で積極的な役割を演じた人物は、賀川をおいて他にないでしょう。

その彼が最後に到達したものが協同組合運動でした。社会運動が左翼的になると闘争的になり暴力もやむをえないという性格を強めてきます。賀川にはこのことが評価できませんでした。その中で相互扶助と友愛という精神にたつものとして、自分の思想にもっとも適合し、これこそが人間が新しい社会に展開していく基本的な姿だと考えたのが生協、あるいは協同組合運動であったわけです。経済の全領域を包括した運動の重要な一翼として購買組合（生活協同組合）を考え、さらに協同組合の思想として農業協同組合、漁業協同組合という生産者の協同組合というものも重要視します。

一方、昭和初年から、精神的な運動、つまりキリスト教の牧師であった彼は、伝導活動により多くのエネルギーを注ぎ第2次世界大戦を迎えます。

賀川は人間の問題について精神と肉体を自己の中に一体として持っているものと考えました。心とものを一体化してとらえる、すなわち経済的な世界と信仰(精神的な世界)を一体化してとらえています。協同組合(つまり経済的な活動)をすすめていく上で、

あるひとつの精神に支えられてやっ払いこう。この点を強調し、協同組合に情勢を燃やしました。

物的なものが支配あるいは物的な世界が次落しているために貧困があり、それゆえいろいろな犯罪が起こります。賀川がスラムにいた時、かわいがっていた子供達はその後娼婦やスリになってしまいました。そうなったのは物的なものの欠乏によります。経済的な領域を大切にしていかなければなりません。しかし人間の真のあり方をその中で見失ってはなりません。賀川は労働組合運動をしていて「労働者は人格である。商品ではない」と強調しましたが、彼の全社会運動は人間性の回復に向けられていました。

賀川の人間(性)解放の思想は、現代においてどのような意味を持つでしょうか。私達のはたしてどこまで人間性を確立して生きているか、というと大変大きな問題をはらんでいます。生産における疎外の問題は、かつてよりひどくなっており、危険な様相がコンピューター時代の中で私達の周囲に起ろうとしています。消費の場においても人間が主体として活動していけるのか、かなりよく考えておかなければなりません。

社会の機能は分化し、部分的なことしかわからないという傾向は避けがたいものがあります。賀川は、労働組合運動のことから農民組合、消費生活全体のことなど、社会全体を見渡していました。そういう目をもてたのは、人間存在としての根源的なところに立って、目の前に出てくる事象に対して判断をしていったからです。

消費の生活を豊かにするだけではなく、心の世界においても豊かにし、そうした豊さが世界的にひろがっていくものとして、協同組合が展開されていくことを期待します。

## いま、協同組合では

## 漁 協

異常なし わずか5%  
— 漁業者健康診査 —

最近、国民の高齢化が進む中、魚介類やノリ、ワカメ等の海藻類が健康食品として注目を集めています。私はこうした水産物を摂取するのに、最も恵まれた環境にある漁業者の健康状態に、以前から深い関心をもっていました。

私達の漁協がある五色町は、淡路島の西浦中央にあり、海岸部は夕日の美しい播磨灘に面し、東部には深い緑の淡路連山がそびえ、海と山に囲まれた風光明媚、温暖で平和な農漁村です。こうした自然環境に恵まれているせいか、五色町は満65歳以上の高齢者が多い長寿の里です。町では健康は幸せの源であるとして『健康の町』宣言をし、毎年、『町民健康祭り』、『町ぐるみ健診』等を実施し町民の健康増進に力を入れています。

ところが、残念なことに、漁業者の場合、こうした催しや健診日と休漁日が一致しない、場所が遠い等の理由で受診率が極めて低く、近年漁業における漁船、漁労設備、加工機械等の進歩により漁業者の労働はかなり軽減されてきていますが、それでも他産業に比べ労働強度は高く、漁業という職業は身体が資本でありながら、健康管理の面がおろそかであり、その対策が問題となっていました。

こうした折、昨年、淡路は全体的に漁業者の健康診査の受診率が低いという理由から津名保健所及び町から『地域保健所行政推進事業』の一環として、漁業者を対象とした生活状態、栄養面を含めた漁業地区の総合的な健康実態調査を実施したい旨の申し入れがあり、組合としても喜んでこれに協力することになりました。

そこで健康管理は、普段の食生活と大いに関係があるため、漁協婦人部にも協力願ひ、出来るだけ多くの漁業者が受診しやすいように、健診日は休漁日

に合わせ場所も漁業地区内の二会場とすることにしました。健診日の一週間前に、婦人部員を中心に事前説明会を開き、検診内容、生活調査、栄養調査のアンケートの記入方法について、保健所の担当者から説明を受け、健診当日に備えました。

当日は保健所、医師会、医科大学等から大勢のスタッフが来られ、早朝より漁業者も真剣に健康診査を受けました。受診率は対象者(漁家の家族)255名に対し、118名で46.3%でした。健診内容は身体測定から医師による一般診察、レントゲン車による肺ガン検診、乳ガン検診や検尿、血液検査等、そして、一日の就業時間、食事の回数、睡眠時間等を調べる生活調査、さらには栄養士さんによる前日の献立をもとにした栄養調査に至るまで、詳しく行われました。こうした検診を生れて初めて受けた人がかなりあり、総合的な健診結果で、異常が無い人は5%と、一般地区、農業地区の30%に比べ大変低く95%の人は健康に問題がありました。

この原因として、生活調査の結果から、船上での長期間労働、及び短い食事時間、季節ごとに変わる(当地区の漁業者は年間数種類の漁業を営む)就業時間や睡眠時間の変動等、生活のリズムの不規則さが指摘されました。また、栄養調査から、食品群別摂取量の充足率でみると、男女とも、砂糖、菓子類、卵、魚、肉類が多い一方、牛乳、小魚類、緑黄色野菜が少ないことがわかりました。

健診後2回にわたり医者、栄養士さんに来ていただき、治療方法、生活栄養指導をおこない、又、血糖異常者を対象に糖尿病教室を続けています。その後、他町でも漁業者健診が実施され、健康について関心が高まってきています。

(五色町漁業協同組合 参事 羽原 正)

## 農 協

## 県農協大会で新たな方針を決定

— ひらかれた魅力ある農協をめざして —

ことし農協は、3年に1回の農協大会を開く年にあたる。

昭和23年に農協が発足して、ことしで40年になる。戦後の農村経済の復興、農業基本法(昭和36年)にもとづく農業の近代化、農業構造改善事業など、農協は、農業・農村に大きな役割を果たしてきた。

しかし、逆に高度経済成長時代を通じての兼業化の進展、農業労働力の減少、そして米の消費減退ともなう稲作生産調整をはじめ、多くの農業問題に直面してきている。

農協経営も設立間もない頃の経営不振組合続出にもなう再建整備時代、そして数次に及ぶ合併促進など、農村部で次第に激しさを増す競争に対応して経営力の強化につとめてきた。

ことし、兵庫県の農協は、第24回兵庫県農業協同組合大会を、11月18日、神戸市の兵庫県農業会館で開催し、今後3年間の県下農協全体の運動方針を決議した。

“新たな協同活動への挑戦” “ひらかれた魅力ある農協をめざして” をメインスローガンとした「地域に根ざした第2次3か年運動」の展開を議案として、次のような提案が行なわれた。

1. 地域農業の振興と構造再編のための対策  
地域営農集団を育成して低コスト化と消費者ニーズにあった新鮮・安全・高品質な農産物づくりをすすめる。
2. 健康で豊かな暮らしを築く生活文化活動の展開  
組合員の健康・生活・文化のあらゆる面で、農協が拠点的な役割を果たすとともに多様なニーズに積極的に対応した幅広い活動の組織化をはかる。
3. 地域に開かれた農協組織の確立  
1戸複数正組合員化と准組合員加入の促進による組合員拡充をはかるとともに「戸から個へ」を



第24回兵庫県農協大会を開催

基本とした組織基盤の再編整備をすすめる。

4. 広域農協合併構造の早期実現  
広域農協合併の早期実現で、より強固な組織・経営基盤を確立する。
5. 環境変化に即応し、競争力を高める経営戦略の確立  
中・長期計画のもとに均衡ある収支構造と健全な財務基盤を確立し、トップマネジメント機能を十分に発揮した強固な経営体質を確立する。
6. 組合員ニーズに対応した農協事業戦略の展開  
組合員ニーズに的確に対応し、農協の特性を最大限に生かした事業戦略で、信用・経済・共済事業の拡大強化をはかる。
7. 兵庫県農協総合開発機構と農協総合教育センターの設立  
県下全農協のシンクタンクとしての総合開発機構を設立するとともに、新たに総合教育センターを建設し、組合員・役職員教育の充実をはかる。
8. 農業・農協の発展をめざす対外活動の充実強化  
消費者・地域住民に農業・農協の理解を促す対外広報活動の強化と、農業基本政策の確立・農協諸規制緩和のための対策を強化する。

生 協

## 協同組合の基本的価値 を实践課題として

### 全国生協大会を開催～5,500人が参加

第22回全国生協大会が、さる11月10日(木)神戸市・ワールド記念ホールで開催された。例年、東京で開催されていたこの大会は、本年が賀川豊彦生誕100年にあたるため、賀川ゆかりの神戸を会場としたものである。

日本の各地から集まったおよそ5,500人の組合員は、スライドや寸劇等で構成された『みんなで広げるコープ商品の輪』や『仲間と一緒に健康づくり』等々、全国各地8組合の活動報告に聞き入った。

これら活動報告に共通するものは、組合員の生協運営への積極的な参加にあった。生協の主人公が一般主婦を中心とする組合員であることを、この全国生協大会が示した。

### 協同組合の基本的価値

ところで、ICA(国際協同組合同盟)のマラカス会長は、日本の班活動や組合員の参加の実態を見聞して参加の価値についてインスピレーションを受けたと述べて、この7月の第29回大会で「協同組合の基本的価値」をテーマに問題提起し、4つのキーワードをあげた。それらは

(1)組合員参加、(2)民主主義の徹底、(3)誠実、(4)他人への配慮、である。

この『基本的価値』の提起にいたる背景として、同会長は「協同組合理念は、大衆を燃え上がらせる火花にも似たものであった。この理念はおそらく誕生の瞬間が、最も重要であったのであろう。歳月がすぎて、多くの協同組合人は、巨大な事業を経営し、頭の中は数字で一杯である。数字というものは時には理念を曇らせる。組合員はしばしば忘れられる。」

と述べており、協同組合思想の重要性を彼は強く訴えた。

人間連帯の運動として発展させることが生協の使命

日生協会長であり、兵庫県生協連会長でもある高村会長は、この問題提起を受けて、日本の生協からの見解として、賀川豊彦が協同組合の根本思想としてのこした7項目(利益共楽、人格経済、資本協同、非搾取、権力分散、超政党、教育中心)を今日にも生きるキーワードとしてあげ、「経済効率だけを追及する産業社会の自由競争原理に対し、人間としての向上を願い、心豊かな生活を大切にする、人間連帯の運動として発展させることが生協運動の使命だと考える。人間の社会的存在そのものを高めていくことに生協が役立つのでなければならない」と述べた。

### 4年後のICA東京大会をめざして

生協法制定40年、消費者保護基本法施行20年、賀川豊彦生誕100年という、生協運動にとって大きな節目であった1988年は、ICAによる『協同組合の基本的価値』の提起を受けた重要な年にもなった。

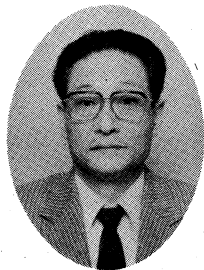
4年後の1992年には、日本の東京でICA第30回大会が開催される。この大会まで、基本的価値についての論議が世界的になされることになっている。生協は、この4年にかけて『協同組合の基本的価値』について論議し、そして、実践しようとしている。



全国生協大会で組合員活動報告の1コマ



## 協同組合運動への提言

主体的な生活文化  
の創造を

奈良女子大学  
教授 武内 哲夫

協同組合運動が、今日に至る運動の原型をほぼ完成した19世紀の中葉では、勤労者の貧困に失業ということに加え悪徳商法が跋扈するという状況を、いかに除去するかということが、当面する運動の課題でした。現在においてもA.F.レイドロウが「2000年の協同組合」において指摘したように、本当に貧しい人々に対し協同組合が十分な役割を果たしているか否かということに、私たちは強い関心をもつ必要があると考えます。しかし少なくとも先進国といわれる国々では、一般的にみて人々の生活状態が大きく改善されたことは認めざるをえないことでしょう。私たちの属している社会でも、ここ30年余の間に戦前とは一変する生活状態がもたらされ、浪費や飽食といったことがむしろ問題にさえなっています。

ここで考えてみたいことは、こうした生活をめぐる状況と協同組合運動のあり方、とりわけ組合員のニーズや生活様式と協同組合運動との関係についてです。協同組合運動には、組合員の期待実現の原則とでもいべき考え、すなわち組合の事業は組合員のニーズの所在に適合し、その内容に十分に答えなくてはならないとする考えがもたれてきました。このことは組合員の経済が貧しく、その期待が生存に係わる内容にあるときには、何の疑いもそこに抱く必要がなかったといえたでしょう。

しかし今日のように組合員の欲求が、多岐多様にわたりかつ高度化しているとき、改めて組合員のニーズや生活様式の実態について点検し、協同組合運動としての対応のあり方を問い直すことが必要だと思ふのです。私には浪費や飽食と同居している安全

の喪失、負債の増大、人間関係の崩壊など「新しい貧困」の背景に、資本の行動だけでなく生活者の側の姿勢や行動をめぐる欠陥があると思われるのです。もちろん個人主義的な生活欲求の拡大は、情報化社会の進展に伴う価値基準の多様化のもとで、大企業による絶えざる欲求醸成と操作の結果であることはいうまでもありません。また人々の生活欲求の多様化や高度化は、現代の経済の発展段階に照応する自己実現の表われとみてとることも必要でしょう。感性やイメージということも、大切にしなければならないと思うのです。しかしそれにも拘らず新しい貧困問題をめぐって、生活者の主体的創造的な生活姿勢と行動の欠陥を指摘する必要があると考えます。

このことと関連するのですがこれまでの協同組合運動は、独自商品の開発と利用を促進することによって、資本制商品の価格と使用価値に対し、一定の歯止めをかける努力をしてきました。またこの活動が、組合員の生活防衛に役立ち運動に参加する人々の拡大を招いてきたことも事実です。そしてこのことが、組合員の生活の見直しの動機を与えてきたことも評価すべきことではあります。

しかしそれにも拘らずそうした運動の作用は、組合員の生活のごく一部分に関する改善ということを超えていないと思うのです。問い直したいことは、もっと根っ子にある生活価値の問題なのです。効率性と利便性の追求に伴う生活価値の空洞化が、全体としてどんどん進んでいると考えるからなのです。ヨーロッパ諸国の人々が、生活様式の変貌のなかにあっても、固有の伝統をしっかりと踏まえていることに着目すべきです。どうして私たちの国では、これほどにいびつな型でのアメリカ的生活様式が、支配的になったのでしょうか。組合員が自らの生活ニーズや生活様式を正しく点検し、主体的に生活文化を創造してゆくことが必要ですし、協同組合運動もそうした理念を明確に掲げ、それに取り組むことが問われているのではないのでしょうか。

# 泊り込み農業体験

生協 産地消費地交流会 農協



分散会による意見交換

県農協中央会、県農協婦人組織協議会、と生協との間で毎年開催してきている「産地消費地交流会」も15回を数える。

今回は11月1日～2日に加東郡の東条農協管内で行われ、灘神戸生協と播磨生協の運営委員19名が、農家に分散して、農作業や農家生活を体験するとともに、農協婦人部と直接意見交換して、産地、消費側の立場の相互の理解を深めた。

農作業体験では、同農協を代表する特産物の栽培農家11戸が受入れの指導にあたり、酒米「山田錦」

の刈り取り、脱穀、ピーマンの収穫出荷、ハウレン草の追肥、イチゴの定植、ブドウの収穫後の管理、ヤマノイモの掘り取り、スイセンの植え付けの作業をそれぞれ体験した。

感想では、「規格にあわせた袋づめに苦労があった」「収穫までの手間が大変なことが分かった。」

また受入れてみて、「農家の苦労が少しでも理解していただけた」「思っていたより、テキパキ作業をしてもらえた」など寄せられた。

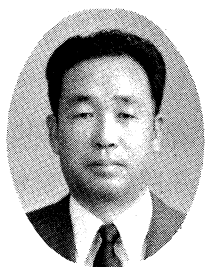
また夜には、生活学習交換会をもち、農協婦人部からは、干しがき作り、生協からは、簡単にできる手芸でポシェットとそれぞれ楽しい技術交換を行った。

二日目は共同作業のヤマノイモの収穫を全員で行った。農協から、「山の芋の一生」の講義を受けた後、収穫作業についても、「山の芋はキズつきやすいので」の注意。しかし、あちらこちらで失敗の声があがり、掘取りのむずかしさをもらしていた。

分散会では、受入れ農家から「消費者ニーズに合うものを心がけているが、ニーズがまとまっていないので苦労している。今回のように、生産段階から理解して選んでほしい」一方、消費者からは、「もっと消費者と連携して、商品づくり、流通経路の改善をはかるべきだ」など、真剣な討議が交わされた。

## 協同組合運動に生きる

### 生きる喜びが得られる運動を



神戸市漁業協同組合  
参事 小坂 靖三

私と漁業協同組合との出会いは、昭和51年からです。その意味ではまだまだ経験不足で協同組合

運動に生きると言ったような口はばったいことと言えるものは残念ながら持ち合わせておりません。

強いて言えることは、それまで30有余年間公務員在勤期間を通じて感じられたこと、考えられることについて述べさせていただくことにさせていただきます。ちょうどその頃の日本経済は高度成長に次ぐ高度成長の時期から持続大型化の時代を経て安定経済成長の時を迎えておりました。一方水産業界におきましても経済水域200海里を大国が打出し、日本は遠洋漁業から大きく後退することを余儀なくされることとなりますが、間もなく海洋200海里時代の正念場を迎え、わが国漁業の本格的対応を迫られる



ことになり、沿岸漁業にとりましても漁業資源の再開発により国民生活に欠くことのできない動物性蛋白質の供給確保と言う重大な使命があり、国においても沿岸漁業振興対策について積極的に取組む方針が示された。

漁業においても資源の増殖をはかるため、漁礁の設置、藻場の造成を行うとともに定着性の高い魚種を選んで県に種苗生産を依頼し、これの中間育成を行い放流する作業を水産研究会(若い組合員で組織)と漁協職員とで、調査研究し技術改良を重ねながら実施した。しかし反面、再生産量が以前と同じならば漁船の近代化大型化、漁具が改良されるに従って、漁獲量の増加に反比例して資源量は減少すると言う現象に見舞われ、思うようには再生産には結びつかない、加えて燃油資材類の値上り程魚価の方は上らないため、漁家の経営は苦しい状況に追いこまれた。現在にあっても魚種によっては極端に水揚量の減少しているものもあって全体資源水準は明らかに低下しつつある。大阪湾では現在関西新空港の他に、明石海峡大橋の建設、ポートアイランド第二期工事等の大型プロジェクトによる埋立工事の計画が次々と進められており、これ等は漁場を狭隘にするばかりでなく、濁りの拡散、潮流の変化等の影響により魚族の自然生体系に対しても大きな変化を及ぼしてることが予測される。従ってこのままの状態が継続されるならば、早晚大阪湾における漁業活動は重大な危機に陥る恐れがある。海域における資源と漁場に見合った漁業の生産体制の再編成、とりもなおさず資源管理型漁業の確立が急がれている。実は資源管理型漁業という用語も決して新しいものでなく、すでに呼ばれて十余年は経過しており、その間様々な理論、学説が発表されていることも衆知のとおりであります。要するに「水産資源の維持増大に努め、資源と漁場に見合った適正な漁獲を行い、再生産資源を含めた資源を永劫持続させ、漁業を永続的且つ安定的に維持していく」ことと理解している。

当漁協においても、地域営漁計画を樹立した中で漁業者の声を集約し未来永劫大阪湾における漁業の

基盤をつくり、ひいては大阪湾の環境を守り、又改善していくことは漁業者としての責務であると位置づけしている。そして「限りなく獲る」のではなく、最も価値の高い方法での販売方法を確立することにより、より付加価値の高い経営を旨すべきであろう、と結論づけている、これ等は何れも漁業者自からの協同による自己規制が前提とされるが、漁業系統の取組みは漁業者をシステムによって管理しようとする姿勢が強く、推進の主体である漁業者そのものの問題が二義的になりがちである。漁業者側においてもこれらが昂じてくると、漁業者間の対立が激しくなり、やがてはそれ故に漁協はなれがでて、「笛吹けども踊らず」の状況が現われてくる。協同組合運動の主体である漁業者の心の問題についても真剣に取り組まねばならぬ時にきていると思う。漁業は操業の危険性と漁獲の不安性のゆえに相互扶助を前提としなければなりたない。したがって、漁業者はもともと相互扶助の重要性を生産の場をとおして自然に体得し協同意識も強かった。しかし、高度成長期の過程で漁業者が経済的に豊かになった自意識と同時に漁業者間に経営規模の格差が広がるに従って、相互扶助の意識が弱まり協同団体である漁協に対しても都合のよい時だけ利用するという精神的貧困が見られるようになった。このことはただ単に漁業者だけの責任として見逃がしてよいのか、漁協運動がこれまでややもすると物質的満足だけを追究しすぎたきらいはなかったかと言う反省に立って見る必要があるのではないか。漁業者が真に生きる喜びを得、将来とも安心して漁業を子、孫に引き継げる精神的理由はただ単に物質的満足だけではないはずである。もっと漁業者の生き方を生みだしてゆく文化的価値観を高めていく漁協運動と言うものが大切ではなからうか。漁業者の質を問い直し、その特有のライフサイクルを踏まえたうえで、生涯に亘る生活設計のビジョンを示し、何よりも漁業者として生きることの喜びを得られるような協同組合運動の発展に努力していきたいと考えている。

神戸市漁協 小坂参事

## やさしい協同組合論(8)

## 非営利組織としての協同組合

協同組合は、その組合員の共同利用施設であり、営利を目的としないことは、その性格上当然のことである、と経済学的には定式化されます。協同組合は、その構成員を対象として事業活動を行い、またその事業による収益が目的なのではなく、事業そのものが目的なのですから、その事業活動での営利主義は、自らの利益のために自らから利益をあげるということになり、これは無意味だ、ということです。しかし、ことはそう単純にはいきません。例えば剰余金の分配方法次第では、内部での所得再配分の問題が生じます。これから何回かで協同組合の剰余金処分に関する原則に非営利主義的行動原理がどう表われているかを簡単に見てみることにしましょう。

協同組合がそもそもの出発点を資本主義に対するアンチ・テーゼとしてのユートピア社会主義（どうかこれを「空想的社会主義」と訳さないで下さい）とりわけオーウェンの思想に持っていること、そして初期の協同組合人たちが、競争原理ではなく友愛の原理が支配する世界を求めていたことは、御存知のことでしょう。協同組合は、資本主義企業が金の結合組織であるのに対して、人の結合組織である、ともよく強調されることです。そこから、例えば生活協同組合における出資金の「資本」性をめぐる議論が出てきます。もっとも僕自身は、協同組合の出資金が資本か否かを論じるよりはむしろ（事業活動を行なう以上、資本が必要なことは当然で）その資本がどのような行動原理の下で運用されるのかを議論した方が、生産的ではないかと思っています。

## それでも個人的利益が……

協同組合は営利を目的とするもの、他の犠牲を省みず自らの利益を追求するもの、ではありません。少なくとも運動の発生期には、社会主義社会を目指す運動として出発しています。しかし、これが即座

に社会的で共同の利益のみを目指すべきだということにはつながりません。むしろ、ロッチデール公正開拓者組合の成功以来、協同組合は個人的利益を増進させることに力を認められ、そこに発展の契機が存在していたように思われます。近代的協同組合運動に先立つ先駆的運動が共同の利益を集団的に獲得しようとして出発したのに対して、ロッチデールの創設者たちはその理念を意識の上では保持しながら、資本主義経済体制の中で事業活動を断続的に営むことによって、徐々に世界を変革する途を選び、その目的を達成するために私的利益を無視しなかったのです。彼らは、人間の善意と情熱の力を信頼しながら（だからこそ、開拓者たちは回りの人々が無謀といい嘲笑する中で彼らの共同の事業を始めえたのです）、それだけではやっていけないこと、やせ我慢は早晩に破綻することを経験的につかんでいたようです。彼らの持っていた理想と現実の絶妙のバランス感覚は、残念ながら徐々に現実の方へと引き寄せられていったように見えますが、それでもその現実感覚が今日の協同組合の発展（最近では停滞気味ではありますが）を招いたといえます。

この小論のはじめにいったことですが、協同組合とは、社会的・経済的弱者が自助と相互扶助の二つの精神を結合し、自らの社会的経済的立場を改善しようとするための社会的組織です。少なくともわれわれの時代では、協同組合はまず協同組合に参加する人々の私的利益に訴えかけることから始まらざるをえません。協同組合を余りよく知らない人々、協同組合の持つ理想をまだ持っていない人々をも包み込むためには、そして事業と運動を持続させるためには、協同組合の持つ理想を語りかけるだけではなく、それがその人々にとって(個人的)利益をもたらす存在であり、有利に個人的必要性を満たす存在であることを示す必要が、まずあります。まだわれわれはそのような社会に住んでいるのです。

(中久保 邦夫)

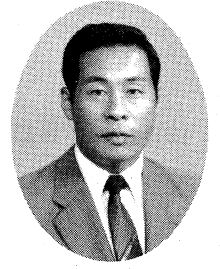
## 協同組合点描

フレッシュパックで  
漁協と交流

福崎町農業協同組合  
営農生活指導課長 安達政義

昭和61年にはじまり、今年で3年を迎えます。県漁協の紹介ではじめたこの事業、ようやく定着して来た感があり婦人部会員約400名になりました。この運動の展開については、すでに婦人部活動の中で毎月1回の健康サービスデーを6年間続けて来た過程においてより新鮮で良質しかも健康食を求めらるうら婦人部より希望が多かったのは肉と魚でした。61年春婦人部の事業として神戸市漁協への視察研修を2度3度行いその年9月よりフレッシュパックの共同購入をはじめ、魚の陸揚げの様子やせり市の状況さらにそれぞれ魚種ごとの料理方法など研修し認識を深めました。現在毎月1回実施をしていますがその月によってとれる魚がいろいろ変って来るので何が入るのか楽しみにしています。ただ困ることはその日になって海が荒れ漁に出られなくなって予定が変更になる時、なにしろ200名近い人に連絡をせねばならないわけでこれは大変な事です。今昼に陸揚げされた魚がその日の午後3～4時頃に福崎に届いています。配布の方法については当初生活班と同じ様なシステムでという考えをしていたのですが80数名の全職員がそれぞれ5～6戸を担当し一斉に配布をし前回の空容器と代金(200円)を受取って帰るようにしています。組合員の農協離れがいろいろとりだたされていますが、組合員とのふれあいの場づくりとしてあえて職員配布に踏切り大変喜ばれています。毎回入る魚の料理方法が配られるので今まで魚の料理をしたことがない若い婦人層も今では上手になり自慢話がいろんな機会に耳にするようになりました。

漁協との交流も3年目になり今漁協婦人部との交流や福崎町でとれる農林産物そしてみそ、もろみなどの利用も要望があり近々開始する運びとなりました。農協間利用もさることながら私達の漁協との出会いを大事に相互理解の上になんて頑張りたいと思っています。

観光漁業の  
開発も

坊勢漁業協同組合  
参事 上田常夫

姫路市の南西18kmの播磨灘に点在する家島群島の中の坊勢島は、島の住民の大半がその生計を漁業に依存している純漁村地域です。古くには鯛の縛り網で活況を呈していましたが、現在の漁業形態は底曳網、船曳網、刺網、海苔養殖、魚類養殖漁業など、水産資源のあらゆるものを根元とする漁業へと変遷してまいりました。島には他にこれといった産業が無く、新規漁業者は漁業一本に依存し、漁業者の増加が今尚続いている状態です。

昭和43年より開始された海苔養殖、又、近年の船曳網の普及によって、労働力の吸収が出来てまいりましたが、高級魚類が激減している状況の中で限られた水産資源によって、如何に生計を維持向上させて行くべきか、抜本的対策を早急に必要とする時期となっております。

これらの課題をかかげ、昨年末、隣の家島漁協とともに、計画営漁推進事業に取組み、底曳、船曳、磯端、海苔養殖、魚類養殖等の各漁業部会を編成し、その方策を模索している最中です。

その方策として、漁獲制限に加え、禁漁区の設定、稚魚放流、魚礁設置などによる漁場造りの実施、又、離島である為の不利な漁獲物販売体制を改善するため、産地直送、活魚輸送、共同出荷などの昨今の新しい販売方法の導入等、今後真剣に検討し、実施しなければならないと思っております。

当地区のこれから生れる若い労働力を吸収する為には、地場産業である漁業の振興が是非必要です。幸い当地区漁業は海の産物のあらゆる物を漁獲しており、今後水産加工の普及も大いに期待できます。

また、昨今のレジャーブームを反映した、観光漁業の開発などもその一つと思います。今後、これらの実現の為、組合員、役職員一致協力して、1つ1つ地道に進めて行きたいと考えております。

## 協同組合研究 NOW

〈No. 10〉

10月15、16日に日本大学商学部で協同組合学会、第八回大会が開かれました。第一日目は「生産協同組合の意義と可能性」というテーマでのシンポジウム、韓国農協専門大学の徐箕源先生の韓国農協運動の発展経過と現在の転換点についての特別講演、二日目は、ストックホルム大会の参加報告（今井工学院大教授）、二会場に別れ、個別報告がありました。

シンポジウムは、相変わらず長すぎるのではないかという感が残るものの、これからの協同組合についての議論とあって、僕にはたいへんおもしろく、刺激的でなおかつ、春季研究集会について抱いた前回の感想を再び抱かざるをえないジョッキングなものでもありました。富沢賢治先生（一橋大学）の司会（レジュメの労働者生産協同組合に関する日本語文献は、きっと役に立ちます）で始まった論議では総じて、物の生産よりはむしろサービスの生産にどの報告も言及し、強調点がおかれていました。全般の感想ではこの点にもっと焦点を当て、また今、なぜ生産協同組合なのか、を問うべきでした。

総論としての第一報告（伊東先生）は、問題が生産協同組合一般ではなく、「労働者」生産協同組合であること、それが労働の場の創出、労働者の主体性・自律性の促進、画一の商品ではなく多様小規模生産に時代が移りつつあるという変化の中での優位性をもつことを強調しました。また、第二報告で石見尚さんは、現代の労働者生産協同組合の基本的特徴として①ハイテク、サービス産業中心、②社会的目的と経済的目的の同時達成、③労働者の自己表現手段、を挙げます。ついでケア・サービス、リサイクリング・サービスなど地域社会との結合が強く、「業際事業」で成功の可能性が高いこと、非金銭的満足による必要性に対応する事業体であることに事業形態の特徴を、そして所有の共同化ではなく、むしろ労働の共同化、社会的弱者の就業機会の創出、地域社

会建設の不可欠な要素としての可能性が強調されました。

そして、第三報告で「中・高年齢雇用・福祉事業団全国連合会」の永戸祐三氏は、先立つ二つの報告でいわば理論的、預言的に語られたことがまさに現在進行形であることを具体的にかつ、（ほとんどアジェンションとってよいほど）きわめて情熱的に示してくれました。それは構想と情熱という点で協同組合の既存部分をはるかに抜いたもののように見えます。法的には事業協同組合形式を援用しているこの労働者協同組合は、サービス部門を中心とする「いわば仕事おこしの協同組合」と自らを規定し、その仕事が単に組合員に働く機会を与えるだけのものではなく、社会的に有用な「よい仕事」を通じて達成されるべきものだと認識しています。①労働者による既存の諸々のあり様への対案の提示、②とかく疎遠な労働組合運動と協同組合運動の結合による地域社会の建設、③労働者が労働の場で、また経営の局面で「主体になること」の難しさの認識、に触れることから始まったこの報告は、「雇われもの根性」をどう克服するかを語り、労働者協同組合のはらむ、私物化の危険、経営主義と社会運動のあいだのバランスの欠如による失敗、市場競争の中での経営技術と資本の獲得の重要性を語ります。医療廃棄物の処理の経験から生まれたという「捨てるゴミのむこうにも人がいる」という合言葉のもつ想像力の豊かさは、われわれに必要なものです。

個別報告では、農林中金研究センターのみなさんの報告が聴き応えのあるものでした。もう一点、機会があればぜひ、BBCのモンドラゴンの記録をご覧下さい。兵庫県でも上映会ができませんか？

（中久保邦夫）

## 編集後記

ようやく創刊から10号を迎えることができました。少し学術機関紙っぽくて、あまりおもしろくない、むずかしいと批判もいただいておりますが、協同組合間協同に関係する方々からは、注目していただいておりますこと、厚くお礼申し上げます。これからも、少ないスタッフですが、頑張っていきたいと思っております。 (O)